

November. 2006

Vol.3

—巻頭言—

「ともに創り出す姿勢を大切に」



日本同盟基督教団 のびどめキリスト教会牧師
白石 剛史(前 神学委員長)

2005年7月の設立総会からわずか1年という短い期間ではありましたが、福音讚美歌協会理事(神学委員長)としてご奉仕させていただく特権を与えられ感謝申し上げます。このたび2006年の7月17日行われました第一回定期総会におきまして、理事としての任を離れることになりましたので、今までの皆様方のお支えを感謝しつつ、今後皆様の働きが主にあってさらに祝されたものとなりますよう心からお祈りし、一言ご挨拶させていただきます。

福音讚美歌協会はその英語名を **Japan Evangelical Association for Congregational Singing** (略称 **JEACS**)と申します。直訳すれば、「会衆讚美のための日本福音協会」とでもなるでしょうか。すなわち当協会は、ジャーナル第2号で林桂司副理事長(青梅キリスト教会)が書いておられたように、会衆讚美の振興を願っての団体なのです。ですから、もちろん福音派としての新しい讚美歌の編纂ということが大きな事業の一つではありますが、それを超えて、会衆の讚美がより豊かなものとなっていくことが第一の願いであり、当協会の様々な活動がそこに実を結んでいくことこそ、当協会存在の意義と言えるかと思えます。

そこで、そのような視点から「讚美歌の編纂」というものを考えますときに、私はあたかも文部科学省が検定教科書を発行するような視点で「讚美歌」が編纂されるのではなく、会衆が生み出すという視点から讚美歌編纂が検討されることを切に願うのです。つまり、牧師・教師・教会音楽専門家が作り上げた「模範的讚美歌」、「教科書的讚美歌」というようなものではなくて、会衆とともに創り上げられていく讚美歌であってほしいと願うのです。それは、牧師や教師も突き詰めれば礼拝する民(会衆)の一人であるという視点を失わない讚美歌ということでもあるでしょうか。

日本の教育は文科省検定済の教科書をいただいて、それを学び暗記するというような受身の姿勢が基本的です。それは自ら創り出すよりも、与えられたものをありがたく受け取るという姿勢になりがちなのです。私は、そのような姿勢が「讚美」においてさえ定式化されることのないようにと願うのです。

地域教会はそれぞれに特徴があります。年齢の違いや神学的色合いの違いによって、どのような言葉遣いが愛されるかも違います。そのような違いをお互いに尊重

し合えるような、また受入れ合えるような、会衆の側から創り出される讃美歌が誕生して欲しい。それが私のささやかな願いです。そのような意味で、これから創られる讃美歌は、何度も改訂・増補されていく讃美歌ということになるのでしょうか？「決定

版」ではなく、常に成長していく讃美歌というイメージを私は持っています。

讃美歌委員会の先生方をはじめ信徒の皆様の方々の今後の活躍を陰ながらお祈りさせていただきます。本当にありがとうございました。

第1回 定期総会が開催されました

(2006年7月17日(月・祝) 於:世田谷中央教会)

2005年度の事業報告、理事会及び委員会報告、決算報告、2006年度の事業計画及び事業予定、予算案が審議され、それぞれ承認されました。

また、理事及び監事の交替があり、補欠選挙の上、新しい理事と監事が承認されました。

新しい理事及び監事の氏名は下記のとおりとなりますので、ご報告致します。

理事交替

旧:白石 剛史(日本同盟基督教団 のびどめキリスト教会)

新:池田 勇人(日本同盟基督教団 霞ヶ関キリスト教会)

監事交替

旧:飯田 勝利(前・JECA鹿島福音キリスト教会)

新:奥田 健一(JECA栗橋キリスト教会)





第3回 教会音楽セミナーが開催されました。

第3回セミナー講演

「現代『讚美歌集』」事情:なぜ新しい讚美歌集が次々に? ～ 混沌とした現状整理の試み～

講師：井 上 義
(日本同盟基督教団 等々力教会牧師)

I. 礼拝と讚美の刷新を巡る流れ

いつの時代にも、礼拝と讚美に関して、伝承されてきたものを保持しようとする動きと、刷新しようとする試みが見られる。現代における、そのような伝統に対する態度を、三つの「復興」「刷新」「革命」という運動として理解する。

(1) 復興の動き - 20 世紀に顕著であった "Liturgical Movement" と言われる典礼復興運動は、現在の教会の礼拝において「失われている本質的なもの」を、特に歴史研究の視点から復興する事を意図する運動である。より古く、広く共通の礼拝内容を模索し、しばしばそこに教会の「祈りの法」(lex orandi)を見出そうとする。つまり、伝統に固執する、というよりも、彼らの意識の中では、本質的なものを歴史的な視点で正しく見分け、霊性の回復、を目指す運動である。この運動において讚美は、礼拝の「霊性」にとって本質的なものと理解されるが、例えばグレゴリウス聖歌、等の「歴史的な信仰遺産」の研究・復興に力が注がれる。

(2) 刷新の動き - 歴史的な研究の成果を重んじる、という態度は上記の「復興」運動と共通であるが、しかしこの運動は、過去の遺産への復帰よりも、歴史に根ざしつつ現代への適応を意図している。具体的には、カトリック教会の第二バチカン公会議などが、この運動の成果である。讚美の領域においては、いわゆる "Hymn Explosion" 運動、あるいはフランスのテゼー共同体の讚美などがあげられる。いずれにおいても、伝統に対する

一定の敬意と評価を持ちつつ、しかし現代的であるための創作意識が顕著である。とりわけ、"Hymn Explosion" においては、讚美における「歌詞の現代性」という事が大きくクローズアップされている。

(3) 革命の動き - 教会の歌を「歴史的な信仰の遺産」と理解する視点から、ある意味完全に解放されているかのような運動である。とりわけ礼拝形式、礼拝の言葉、讚美の旋律・楽器、等において、過去との決別は顕著な運動である。いわゆる "Praise & Worship" 運動において、この傾向は顕著に見られる。礼拝の流れの回復と、礼拝の言葉の日常性の確保、さらには礼拝の音楽の同時代性(あるいは大衆性)、とりわけこういったような点において、この運動は文字通り歴史遺産に対して「革命的」に振舞う。自由なスタイル、新しい旋律、楽器、印刷された文字の使用の激減、等々。しかし、この種の礼拝で提示される信仰の言葉の内容、あるいは神学は、概して保守的であり、とりわけ上記の "Hymn Explosion" 運動のそれと比較するならば、讚美の歌詞には革命性はほとんど見られない。



講師の井上 義師

II. 讃美歌と歌集における「伝統派」と「革新派」

上記「復興」「刷新」「革命」という三つの動きの中で、プロテスタント礼拝の文脈において関係の深い後者二つにのみここでは注目し、それらを二極化させた形で端的に「伝統派」「革新派」として記述する。

A) 伝統派の動き

- "**Liturgical Movement**"との関わりにおいて、しばしば **Liturgy** の復興を意図する。即ち、讃美歌集の中に、キリエ、グロリア、アーメン唱、応答唱、等の、伝統的 **Liturgy** の枠においてよりよく機能する項目が多くなる。
- "**Ecumenical Movement**"との関わりにおいて、讃美においては、諸教派間の伝統融合の試みがしばしば見られる。結果として、教派の枠にとらわれない、音楽ジャンルの多様化が見られる。
- 現代神学の影響により、例えば、人権運動、エコロジー、女性神学、貧富の格差、といったような、現代社会の問題、あるいは教会の祈りの課題にまで踏み込んだ讃美歌詞がしばしば見られる。それに伴い、従来の十字架と「私の救い」に特化したかのような福音唱歌の作品群が、大幅に縮小されるきらいあり。
- 言葉への拘り、いわゆる「包括的表現」(**Inclusive language**)への意識が顕著である。日本語では、不快語、差別語、古語、といった問題に加え、天皇制用語、神道用語への一定の評価と反省とが問題となる。
- 文化人類学の影響により、とりわけ讃美において、「世界性」の意識、あるいは「西洋優越主義」の是正が目指される。即ち、非西洋賛美歌作品への興味の増大、異文化破壊の歴史と密着する類の海外宣教の歌の減少、等が顕著である。
- 音楽的「質」への拘りにより、概してポップ系一系の音楽の排除が、この運動においては見られる。旋律や音楽語法の一定の歴史性を保つことにより、逆に歌詞の刷新の自由度を増そうとする意識が感じられる。

B) 現代派の動き

20 世紀という歴史的な文脈に鑑みると、**Praise&Worship** の「ポピュラー音楽による礼拝革命」の動きは、1950 年代のイギリスによる「フォークミサ」運動にその端緒を見る。ここにおいて伝統的な **Liturgy** の中に、ポピュラースタイルの音楽が確信犯的に取り入れられたからである。以後、米国での、"**Jesus Movement**" 等を経て、**Contemporary Christian Music** の元祖ともいえる "**Gaither Trio**"、さらには、"**Maranatha**" による出版活動等の動きを経て、"**Praise & Worship**" 運動や、"**Contemporary Christian Music**" といった言葉や運動は米国発で、今や世界中にあまねく見られる「ポピュラー音楽による礼拝革命」運動に至っている。音楽的な面においてこの運動は、歌集不要論、歌詞の短さ・覚えやすさ、音楽のポピュラー性(即ち、会衆の音楽言語)、そしてワーシップ・リーダーの存在による礼拝の流れのコントロール、等が積極的に評価される場所である。

III. 現代日本の讃美歌集

讃美歌学的に言えば、1970 年代から 90 年代にかけて、上記二つの刷新運動が、世界中に巻き起こった。これらの運動は、厳密に言えば、神学運動、あるいは信仰復興運動、の一部である。しかし、日本の教会の歌においては、概してまずレパートリー先がありき、の感が否めない。そこでは「新しい信仰の歌」が一人歩きし、新しい信仰の歌の寄り合い所帯である讃美歌集が発行されても、それを教会の礼拝がどのように受容するべきか、という段階で、大いに当惑が生じる。讃美を受け取る礼拝の、教会の、意識が後で着いてくる、というのが現状であろう。

現行の主要な歌集と、これらの運動の関係は、讃美歌学的な視点から一瞥すると、明瞭である。「讃美歌21」「新聖歌」「聖歌統合版」「リビングプレイズ」、こういった歌集について言うならば、上記 "**Hymn Explosion**" との関連が明確に意識されているのは、「讃美歌21」のみである。「リビングプレイズ」は、

後者、即ち **Praise&Worship** を最初から念頭においた歌集である。間の二者、即ち「新聖歌」並びに「聖歌統合版」においては、これらの運動は明確には意識されていない。しかしいずれも日本語の創作・翻訳活動についての明確な問題意識は感じられる。

いずれにせよ、讃美は、「教会の霊性」の中心近くを担う、理念と実践、言葉と音の響きの融合体、である。様々な意味で、もっと積極的に熟考され、議論され、かつ大胆に実践が深められていくことを願ってやまない。



セミナー参加者の様子(世田谷中央教会)



第4回 福音讃美歌協会 教会音楽セミナー

「さんびかを歌う、さんびかを考える」

～福音讃美歌協会が検討する新しい讃美歌～

日時 2006年11月20日(月)

19:00～20:30

場所 キリスト教朝顔教会

企画：福音讃美歌協会 讃美歌委員会

主催：福音讃美歌協会



※参加申込み、参加費は必要ありません。

※多くの方々のご参加をお待ちしております。

讃美歌委員会報告・お知らせ

1. 讃美歌集編纂事業の現状について

讃美歌集編纂の基本方針(2006年9月現在)

A. 基本的なこと

- (1)福音派の諸教会の現状、福音派の神学の枠組みを、常に意識する。
- (2)あらゆる音楽ジャンルを排斥しない。
- (3)当面は、**200**曲以内の、新作主体曲集を目指す。
- (4)3年を目処に、上記歌集の出版を目指し、その後現場のフィードバックを経て、更なる検討を続ける。

B. 用途について

- ・礼拝の会衆讃美に用いる讃美歌集。

C. 神学について

- ・聖書の権威、十字架の贖い、福音宣教に重きを置いた福音的な内容。現代的なテーマに対する一定の配慮。包括的言語について福音派の立場で考慮。

D. 作品について

- ・文語か口語かという枠にとらわれない、美しく分かりやすい日本語の歌詞。
- ・詞と曲との結びつきにおいては、会衆が歌いやすく、覚えやすいことに配慮。
- ・日本ではじめて紹介される讃美歌(詞あるいは曲)を多く含む。
- ・既に日本で紹介され親しまれている讃美歌は、そのまま収録することをせず、詞あるいは曲の変更により、新たな価値が生じると考えられる場合にのみ収録。

E. その他

- ・さまざまな用途に対応できるように、充実したサブジェクト・インデックス(主題による索引)を付す。
- ・この讃美歌集に付随して、様々なツールや研鑽の場を提供する。

2. 協力者の募集について

上記の讃美歌集編纂事業、とりわけ会衆讃美歌創作の領域において、関係諸教会よりの人材を募集します。

分野： 作詞、翻訳、作曲、編曲、楽譜作成、演奏。

資格： 福音讃美歌協会の会員もしくは準会員である教団の教会の信徒・教職、あるいは個人の賛助会員の方

志のあられます方は、関係領域に関する簡単な履歴書、及び牧師よりの推薦状を併せて、讃美歌委員会宛てに、福音讃美歌協会事務局気付にてご郵送下さい。尚、事前のメール等による問い合わせは、讃美歌委員会担当理事の井上 dikaos@hymnos.orgまでどうぞ。

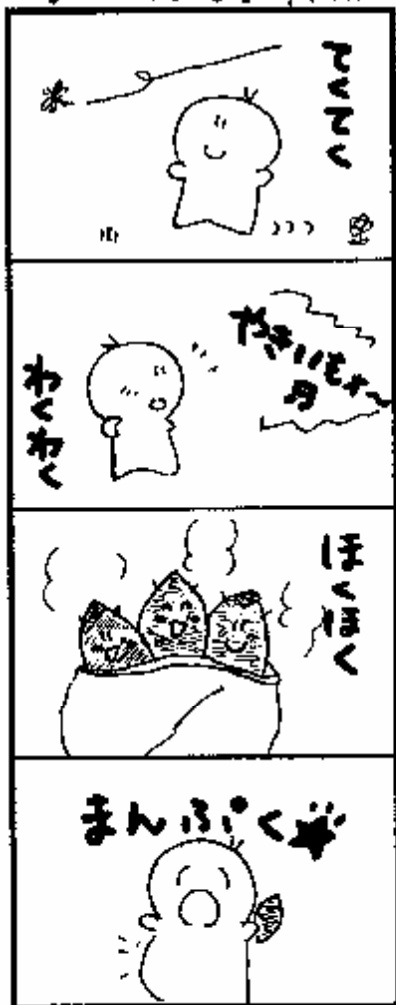
皆様よりの、奮ってのご応募をお待ちしています。

福音讃美歌協会の会計年度は4月～翌年3月までと定められております。
2006年3月末において会計が締められ、会計監査が行なわれました。
4月から新しい会計年度がスタートしています。

2005年度 会計報告	
【2006.2.26～2006.3.31】	
収入	
会員年会費	5,000
献 金	15,000
繰越金(～06.2.25)	319,446
収入合計	＼339,446
支出	
理事会費	8,520
ジャーナル費	23,140
事務費	7,840
人件費	80,000
支出合計	＼119,500
残高	
収入－支出	＼219,946
次年度繰越金 ＼219,946	
【会員年会費】	
[賛助会員]石川岩夫	
【献 金】	
[教会]世田谷中央教会	
[個人]武田慎治・佐和	
(敬称略)	

2006年度 会計報告	
【2006.4.1～2006.8.31】	
収入	
会員年会費	615,000
献 金	53,500
前年度繰越金	219,946
収入合計	＼888,446
支出	
理事会費	17,422
ジャーナル費	77,700
セミナー費	15,180
委員会費	25,780
総会開催費	11,263
事務費	77,152
人件費	160,000
支出合計	＼384,497
残高	
収入－支出	＼503,949
【会員年会費】	
[正会員]	
日本同盟基督教団、日本福音キリスト教会連合	
[賛助会員]	
石田美子、神谷聡子、菅生キリスト教会、辻 喜男、小見 勲、三川献児、関口悦子、三浦健康、栗橋キリスト教会、世田谷中央教会、手稲福音キリスト教会、横溝達夫、土井康司、稲垣博史・緋紗子	
【献 金】	
[教会]世田谷中央教会(2)、こどもの国キリスト教会(2)、武蔵台キリスト福音教会(2)	
[個人]斉藤真木子、高橋和江、吉沢修平	
5/12セミナー自由献金	
(敬称略)	

11月4日 by yukiko



11月4日

=会員申込み方法=

会員の種別は**正会員**(教会・教団・教派等)、**準会員**(各個教会、団体等)、**賛助会員**(各個教会、個人等)の三種類です。賛助会員につきましては、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵送又はFAX送信していただくことにより入会することができます。

正会員、準会員につきましては、協会へ直接お問い合わせください。入会のしおりを郵送致します。

振替口座

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127
名称 福音讃美歌協会

◆銀行口座◆

みずほ銀行 ユーカリが丘支店
普通預金 口座番号 1604668

◆郵便貯金口座◆

名称 福音讃美歌協会
番号 10500-82654721
名称 福音讃美歌協会

編集後記

『福音讃美歌ジャーナル』第3号を発行しました。巻頭言を白石理事に書いていただきましたが、白石師は、さらに広く超教派の働きに専念するため、この度で理事を退任することになりました。しかし白石師はさらに広い視野で福音讃美歌協会の働きのために祈り、支えて下さるでしょう。今までの尊い奉仕を感謝します。(は)



福音讃美歌協会 (JEACS)

〒154-0015

東京都世田谷区桜新町 1-14-22

日本同盟基督教団世田谷中央教会内

TEL 03-3428-2388

FAX 03-3428-2380

福音讃美歌ジャーナル Vol.3

発行者・安藤能成

編集者・林 桂司

URL <http://www.ieacs.com>

E-mail info@ieacs.com